

ネパールの風

98ネパール日記

ヤラ・ピーク登頂記

その・8

後藤 隆徳

降雪のなか我々5人は黙々と登っていた。ルートは特に難しくなかった。日本の冬山と変わらなかった。高岡と今泉がトレースを外して歩いているので下から注意する。万全を期さなければならない。雪稜を登り切ると断崖の上の平坦地に出た。ここで今日初めての休憩をした。全員快調である。標高は約5150m。BCから400m登った訳だ。残すはあと400mである。熱いお茶を飲んだ。幾分霧が晴れ下の方も見えてきた。

この上はちょっと急な雪壁で50m程フィクス・ロープが張ってあった。しかし、フィクスがなくても登れない壁ではない。壁を越えると広い尾根に出た。ゴメルがジグザグに登ろうとしているので、真っ直ぐ行くと後ろから指示する。ジグザグに行かなければ行けない斜面でなかった。

今泉が突然な「氷だ、氷だ」と叫んだ。歩いている尾根には新雪が乗っていたが、一応ここも氷河であるから当然下は氷である。後日談だが98年秋、つまり私達が登った昨年の秋、静岡市の静岡山岳会の山田 透さん達がここを訪れた。結果は案内したシェルパがヤラ・ピークを良く知らないで登れなかったという。

先日、ルートとかピークの確認で拙宅を山田さん達が訪れたが、その時見せてもらった写真は春に較べようもなく雪が少なかった。その分、5km付近から分厚い氷河が剥き出して、いたる所に大きなクレバスが口を開けていた。その氷河に進路を阻まれたのも登れなかった一因と話していた。



体調は良かった。心配された高山病の兆候は全く無かった。日本の3千mの山に登る時と全く変わらなかった。このままグングン6千m位まで登れる感じだった。余裕ある登頂スケジュールのなせる技だろう。

霧の中、右奥に顕著なピークが見えてきた。どうやら目的の山が射程距離内に入ったようだ。そのままグーンと一気に登ってしまう。そして稜線に飛び出た。ちょっと体調を落していた加藤はそこにドドッと横になってしまった。

山々の霧が徐々に上がり今まで向こう側で見えなかったLangshisa・Ri (ランシサ・リ、6427m)、Morimoto・Piak (モリモト・ピーク、5951



- (上) 5/1 ヤウ・ピーク
にアック
- (中) ニセピーク
にて中央が
ゴメル
- (下) ナイ・リッジ
を越えて
ピークに向う

m)、Bhemdang・Karpō・Ri (ペンタン・カルポ・リ、5691m) などが見えた。

そしてそれらのすぐ東・北側はチベット国境だった。条件が良ければ8kmのShisha・Pangma (シャシャパンマ・8013m) が見えると楽しみにしていたが、高い山々はまだ深い霧が取り払われなかった。

ヤラ・ピークと思われる右手の顕著なピークに細い雪稜が続いていた。傾斜はさほどでないが、左右は ナイフ・リッジで落ちれば完全にアウトだ。特に左手のSalbum氷河側は一気にkm以上切れ落ちていた。このような所は強風の際はイヤだが幸い今日は無風状態だった。

一休みしたのでゴメルに「さあ、行こうむ」とうながす。ところがどうだろう、ゴメルは何故か「ここで良い」と言い動こうとしない。こんな中途半端な所がピークであるはずがない。誰が見たって一目瞭然である。だが、ゴメルは頑として動かない。

これは後で考えたことであるが、前述の静岡山岳会の場合もそうだが、ひょつとしてゴメルはヤラ・ピークがどこか知らなかったのではないだろうか。いくらなんぼでも特に悪天候でもないのにピークを前にして、どうして動こうとしなかったのか。いまだに私には理解できない。

それとも、もう一つ考えられるのがB隊のゴトウ・マリへの配慮か。この隊全体のメイン・リーダーの彼女達がまだ登ってこない現在、ここで待つしかない……。

事実、ゴトウ・マリが45分遅れ位で我々の前を通過しヤラ・ピークに向かうと、ゴメルは何故か果然動きだし、ヤラ・ピークに登頂出来た。

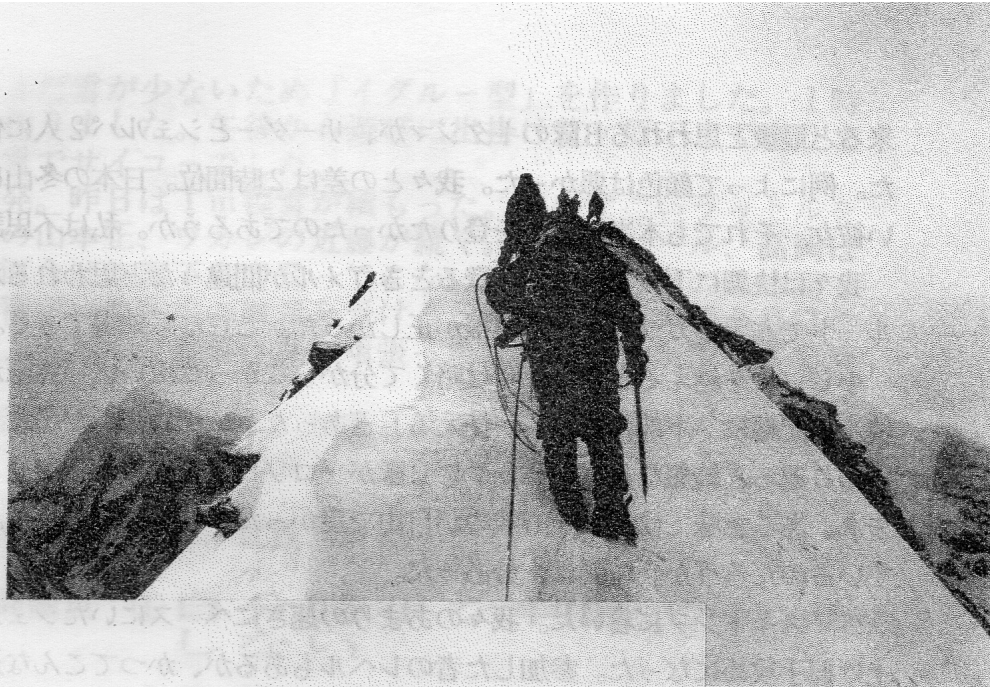
全員で堅い握手。とにかくいろいろあったが全員無事に登頂出来たことは、大きな喜びであった。皆には本当に世話になった。本来なら今頃カトマンドゥの病院に入院していたかもしれない。高岡、加藤、今泉も良く頑張った。初の海外登山でこれだけ登れば十分であろう。しかも、まだ十分余力を残している。

私は海外登山2回目で、ささやかではあるが、夢にまで見たヒマラヤに足跡を残すことが出来た。機会を与えてくれた家族、妻には特に感謝しなければならないだろう。また、いろいろな意味でこれを契機に更に飛躍したい。そんなことを考えながら頂上の小石を三個ヤッケのポケットに忍ばせた。



振り向くとランタン・リルンをバックに雪稜を何人か登ってくる。なかなか雄大な雰囲気だった。頂上は狭く段々と混んできたので、先頭をきつて下山を始めた。ニセ・ピーク下の安全地帯まで下りザイルを解く。そして「裾野麗峰ハイパイン・クラブ5周年記念登山=ヤラ・ピーク5520m」の横断幕を出して記念写真を何枚か撮った。

いつのまにか天気はすっかり回復し再び雄大な景色が見られるようになった。記念写真撮影後はゴメル、今泉を置いて3人でグングン下る。例のフィックス・ロープの雪壁下に



(上) ヤウ・ピーク
直下

(中) ヤウ・ピーク
頂上

(下) 頂上から
振り返る
バックはラン
タンリルン



来ると最後と思われるB隊のキタジマが、サーダーとシェルパ2人に付き添われ登っていた。例によって顔色は悪かった。我々との差は2時間位。日本の冬山に一度も登っていない彼女。それでも本当にここを登りたかったのであろうか。私は不思議な気がした。

我々は快調に下っていった。登るときゴメルが間違っただと思われる氷壁はやっぱり誤りルートで左手のガラガラした尾根が正しかった。ここなら納得できる。

小ピークを越えると登った時は暗くて分からなかった広い広い雪原が続いていた。以前読んだ記録に「下部はスキーが使える」とあったが、正にそんな所だった。

振り返ると綺麗な蒼穹をバックにB隊がゾロゾロと集団でナイフリッジを下っていた。まあ、ある意味ではシコタ方式のが自由で良かったか、などと考えた。キタジマはどこまでいっのだろうか。時間は十分あった。

ベースキャンプに着いた。我々のあまりの速さにベースにいたシェルパ達が感嘆の声を上げ握手攻めになった。参加した者のレベルもあるが、かつてこんな速い時間で登ってきた人はいなかったそう。しかし、私はごく普通のペースだったと思っていた。出されたお茶を一気に飲み干した。

(次号につづく。ナマステ・ナマステ)



ニセピーク下のヤラ氷河で横断幕を広げた